

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	開所より地域との連携の中で、人権を大切に共に喜びあえる信頼の介護を理念としてきた。理念の実践に向けて、職員は毎年介護目標を立てている。利用者、家族の意向を大事にして、支援に取り組み信頼関係の構築に努めている。	事務所のカウンターの上にはホーム独自の三つの理念のキーワードが大きく掲げられ、誰もが見やすいようになっている。職員全員で話し合い毎年度、理念に沿った目標を立てており、今年度は「その時の利用者さんにとって一番良い介護をする」ほか二つを指針とし利用者本位のサービスの提供に取り組んでいる。年度の目標は職員トイレにも張り意識づけをし、スタッフ会議等で確認し実践に繋げている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	施設の一部はオープンガーデンとして開放している。恒例のサンまつりには、地域の多くの方々の参加がある。避難訓練に駆けつけて下さるご近所様は顔なじみになっている。季節のくだものやお花の差し入れなど地域の人々との交流が続いている。	町会に加入し協力費を納め良好な関係を保っている。地域の情報は代表者が同じ町会に住んでいることもあり地域の人々との日頃のおつきあいの中から得ている。8月恒例の「サン祭り」は今年で13回目を数え併設の小規模多機能型居宅介護事業所と合同で開催し、利用者の家族や多数のボランティア、地域住民など、100名ほどの人々が集まり賑わいを見せたという。また、剣舞、紙芝居、カラオケ、ハーモニカ、三味線などの色々なボランティアが定期的にホームを訪れており利用者も楽しみにしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	入所申し込みを訪れた方より相談があればその状況に合わせて小規模多機能施設の紹介をして、選択肢が広がるように支援している。理事長は地域住民の集まりに出向き、認知症の人の理解、介護の相談にのっている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議は年6回実施している。運営理念の理解と、ホームでの利用者の状況や事業の様子を報告している。協力を得て避難訓練を実施した。施設の状況を理解していただき、ご近所やご家族とは日常的に協力関係が出来ている。	併設の小規模多機能型居宅介護事業所と合同で年6回開催されている。家族代表、地域の方、民生児童委員、地域包括支援センター職員などが参加し、防災などの会議の内容によっては消防団員も出席している。利用の状況や活動報告、行事の様子と予定、ホームの抱えている課題などを議題に話し合い、出席者からも意見や助言をいただいている。小規模多機能型居宅介護事業所との合同避難訓練やサン祭りなど同一日に開催し、利用者の様子を直に見ていただいたり体験していただくことにより認知症やホームへの理解を深めていただくようにしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議で施設の状況を報告する他、行事に参加して実際を確認していただいている。昨年は実地指導を受けた。指導内容に基づいて介護計画の立案をしている。介護相談員の訪問の際には、利用者とはゆっくりと関わりの時間が取れるように配慮している。	地域包括支援センターから利用者を紹介していただいたり、困難事例などについて相談をしている。市召集のケアマネージャー会議が定期的に開催され、併設の小規模多機能型居宅介護事業所のケアマネージャーが出席しているので情報を得ている。介護認定更新時には家族からの依頼を受け申請の代行をしたり、認定調査員の来訪時には家族了解の下情報を提供している。また、調査時に家族が同席することもある。介護相談員も年3回ほど2名が来訪しており、利用者全員と面談し、退出時に感想などを述べている。	

グループホームサン・オアシス

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束をしないケアを心がけている。状況によりベットの柵が必要な時は、家族の理解を得て実施している。転落の危険が予測される時には、ベットを外して支援している。隣接する施設から訪れる利用者の安全のため玄関は施錠している。	玄関は施錠することなく、自由に出入りできる。外出傾向の利用者もいるが、ホーム前庭や中庭は広く、職員も見守りをしたり一緒に散歩している。転落のリスクが予測される利用者については家族と相談し夜間のみベットの柵を使用したり、布団に変更している。隣の小規模多機能型居宅介護事業所との渡り廊下はお互い自由に行き来できるように常に開かれており、利用者が時にはお茶を飲んでくることもある。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	人権を大切にすることを理念に掲げて取り組んでいる。研修に参加して学習の機会を持ち理解を深めている。職員は互いに日ごろから言葉使いには意識して注意している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度を活用している利用者がいた。後見人や家族との関わりを通して学ぶ機会があった。研修会の参加と施設内研修を実施して更に理解を深めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約内容の説明には、静かな環境で落ちついて話ができるように配慮している。質問や介護への要望を確認している。料金の改定など、変更のある時は文章でお知らせしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族が面会や行事、運営推進会議に来所した際、管理者や職員は積極的に話す機会を持ち、意見や要望を確認している。市の介護相談員の訪問では、利用者一人ひとりと話しをして頂く機会がある。意見や要望は、スタッフ会議で検討してサービスに反映している。	利用者のうち要望等を言葉で表すことのできる方が四分の三ほどおり、難しい方は日頃の様子や生活歴等を勘案し利用者の支援に取り入れている。週3~4回ホームに来訪する家族もいるが少なくとも月1回は訪れており、職員は家族に利用者の様子などを伝えている。家族会の「里の会」が7月の七夕や9月の敬老会に合わせ開催されており食事を共にしながら家族の意見や要望を聞いている。毎月発行する「サン便り」には利用者のホームでの様子を顔写真入りで載せ、職員の異動なども掲載している。玄関左の壁には併設の小規模多機能居宅介護の職員とともにホーム職員の紹介用顔写真とコメントが貼られ家族との意思疎通がスムーズに取れように配慮している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月実施しているスタッフ会議は、代表者を含めて全職員の参加を目標に決定している。項目を設けて意見や提案を出しやすくしている。職員が普段感じる不安や改善が必要と思うこと等から、活発に意見交換し解決することが出来ている。	月1回のスタッフ会議は基本的に職員全員参加で代表者も出席し午前中に行われている。会議の時間帯には職員OGのボランティアに利用者の支援をお願いしているので心置きなく話し合うことができる。毎年度職員全員で話し合い目標を立て、それに沿い職員はキャリアパスの一環としての目標を定め、自己評価を行い年3回振り返りの機会として管理者と話し合っている。別に、ケアカンファレンスを開き家族や利用者が参加することもあるが職員の意思を統一し利用者の満足する支援に取り組んでいる。職場内の風通しも良く、職員の定着率も高い。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	理事長は、職員の意見や要望を前向きに検討して改善に努めている。職員が働きやすい環境作りに積極的に取り組み、利用者に関わる姿勢を示している。職場環境の良さは、職員の勤続年数に表れている。		

グループホームサン・オアシス

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	理事長は、管理者や職員が希望する研修があれば参加を勧めている。また、研修の必要な事をスタッフ会議で職員に話している。研修報告は職員全員が確認して学びを共有している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	ケアマネ会議への参加をはじめ、学習会を通じての交流を深めている。当施設への入居を希望する家族の意向を受けて、施設間の協力体制を整えて、その意向の実現を果たした。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	併設の小規模多機能施設からの入所は、普段から交流があり顔なじみの関係作りが出来ている。体験利用を勧める時は、施設利用者との様子、不安や心配なことは何かを知り、安心して利用出来るように見守る配慮をしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族、利用者が共に納得し施設入所が出来ることは、その後の利用者の生活に大事であることを理解して頂いている。家族の状況や思いを受け止めて、協力して頂きたいことを明らかにして、力を合わせての関係作りが心がけている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と家族の意見や要望は重要なものとして受け止めている。ありのままを記録に残して、それを基に話し合いをしている。利用者と家族が望む生活に近づけられるように、意見や要望は最大限サービスに反映している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は、利用者と共に過ごす年月の中で、支えられ教えられることの多いことを知っている。それを大切に感じており、感謝の気持ちは、言葉にして利用者に伝えている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族との協力体制は、最も重要と職員は理解している。行事や誕生会、カンファレンスの参加、食事介助に訪れる家族や経過記録から日々の様子を確認している家族もいる。遠方で面会が少ない家族には、折に触れて手紙や電話で近況報告をし、安心しているとの返事を頂いている。		

グループホームサン・オアシス

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	住んでいた家の近くを通るとき、希望して立ち寄って家の様子を見たり、育てていた花を摘んでくれる利用者がいる。知り合いや子供たちの面会の折に、一緒にお茶や食事をする場所の提供にも配慮している。家族の協力で受診など外出した際に、家で過ごす機会を作ったり、パソコンに孫やひ孫の写真を映し出して見せる家族もある。	ホームでは馴染みの関係や場所などを大切に支援している。現在、併設小規模多機能型居宅介護事業所からホーム利用に到った利用者もあり、建物の雰囲気や周りの環境も変わることなくホームにも馴染んでいる。入居前に住んでいた近所の方や地区の役員仲間の定期的な訪問を受ける利用者がある。また、小規模多機能型居宅介護事業所に登録している知人と行き来している利用者もいる。家族とともに行きつけの美容院やラーメン店へ行かれる方もおり、お盆や正月、七夕などの行事で生活のメリハリをつけ、一時帰宅する利用者もいる。兄弟会で近くの温泉に出掛ける利用者もあり、誕生日や母の日、敬老の日に、花、手紙などが身内から届くこともある。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者が、お互いに気持ちよく関わり合い支え合えるように、席を変えたりテーブルの配置の変更をしている。利用者や家族の要望に配慮して、気の合う利用者が一緒に過ごすことが出来る場を提供している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	併設の小規模多機能施設より入所された利用者が多い。施設間の自由な行き来や交流により顔見知りの人や、馴染みの場所との関係の継続が出来ている。利用が終了した利用者家族が、訪れて来るその思いに添えるように努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	希望を伝えることが少ない利用者も、日々の会話を大切にして意向の確認に努めている。カンファレンスで職員は活発に意見交換をして、利用者の想いや暮らし方の意向、希望など確認している。	ほぼ四分之三の利用者が思いや意向を表出できる。ホームで穏やかに暮らせていることや職員の厚い支援を受けていることから感謝の言葉が多く、高齢化とともに希望等を申し出ることが少なくなってきた。何か食べたいものがあるような時には自然に言葉が出ているという。言葉で発することが難しい方にはいくつかの選択肢を示し、それに対する目の表情や仕草から汲み取るようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	個々の歴史や暮らし方、生活環境、サービス利用の経過について、出来るだけ情報を頂くように努めている。日々の暮らしの中で、本人から教えて頂くことがある。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	長い年月をホームで生活している利用者も多い。共に過ごす中で、利用者の過ごし方、心身状態、有する力が変化する状況が把握できている。出来ること、出来ないことを職員は確認して支援に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月1回、月末にカンファレンスを実施している。全職員が参加して、課題解決に向けて意見を出し合っている。その結果からサービス計画の見直し、介護計画を作成している。緊急に対応や改善が必要な時には、その状況に応じて計画作成担当者が中心となり話し合いを持ち、介護計画の修正をすることもある。	職員が利用者の衣類の整理や不足する物がないかなど、身の回りをお世話する居室担当制をとっているが、介護計画については毎月のカンファレンスで全職員が意見を出し合い、計画作成担当者がまとめ計画を作成している。計画の期間は長期目標を6ヶ月、短期目標を3ヶ月としており、状況が変わった場合は現状に即し作り変えている。利用者との日頃の会話の中から要望などを汲み取り一人ひとりの計画に反映している。	

グループホームサン・オアシス

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	職員はケアの実践の中で、利用者の言動などから気付いたこと、工夫したこと、次のケアにつなげたいことを個別のケア・経過記録やケアチェック表に記録している。記録は職員全員が目を通して、他職員の記録からも情報を共有して、実践や介護計画の見直しにつなげている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	今まで行なっていないサービスも希望があれば無理のない範囲で実施している。利用者が入院中は、お見舞いと病状など状況の把握、家族からの相談に対応している。併設する施設の協力を得て、入浴支援をした。また、ケア・経過記録を個別のファイルにし、家族の要望に応じて、閲覧できるように準備をした。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の民生委員やボランティア、ご近所など多数の力を借りて、楽しみのある暮らしの支援が出来る。髪のカットをお願いする顔なじみの美容師、お話ボランティアは定期的に訪問している。時には、化粧やマニキュアを楽しませてくれる方、市の出前講座の利用も楽しいひと時の支援につながった。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者と家族の希望に添い、主治医を決めている。利用者の状況や家族の希望があれば、受診の付き添いや往診の依頼など、かかりつけ医との関係を継続し、みどり介護の協力も頂けるように連携している。	半数以上の利用者が利用前からのかかりつけ医を継続しており、現在、ホームの利用者に係わるかかりつけ医は計5名で、協力医も含めホームとの連携をとっている。往診をお願いしている利用者もあり、インフルエンザの予防接種もかかりつけ医の往診の際にお願いしている方もいる。また、訪問歯科の受け入れも可能となっている。緊急受診の際には家族と連絡を取り職員が同行するが、窓口を看護師でもある管理者に一本化し家族への相談・報告を行っている。隣の小規模多機能型居宅介護事業所にも2名の看護師がおり、管理者を含めた3名のうちの1名が必ず在席するようにしているので緊急の場合にも心強い。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師は常に利用者の健康管理や状態の変化に対応している。職員は体調の変化に気付いた時は、ただちに看護師に報告している。併設の小規模多機能施設の看護師の協力は、支援を充実させている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院時は病院の指示、家族の意向に出来るだけ添うように支援している。利用者の状況に応じては、スムーズな退院支援を地域連携室と連携を図りながら最大限努力している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	多くの方が施設での看取りを希望している。終末期のあり方は、サービスの導入時に本人、家族の想いを確認している。また、その時々状況に応じての意向を確認し対応している。急性期の入院から治療が終了して施設に戻り最後の時を迎える場合は、かかりつけ医と連携して、看護師・職員は力を合わせて支援している。	運営規定や重要事項説明書にターミナルケアについて明記しており、利用開始時に看取りに関して家族の希望を聞いている。利用者のうち三分の二の方が90歳以上と高齢化も進んでおり、現在、殆どの利用者がホームでの看取りを希望している。ホームではその状況に直面した時に改めて本人や家族の同意をいただき、医師の協力を得ながら進めるようにしている。家族の希望もあり看取りの要件も揃ったことから今までに11件の方のお見送りをした。職員も看護師である管理者から対処方法についてアドバイスを受け取り組んでいる。	

グループホームサン・オアシス

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急マニュアルに沿って施設内学習を実施している。吸引器の使用方法を全員で学ぶ機会を持った。命の危険性の高い状況は何か、職員がどのような不安を感じているかを把握し学習している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練は、地域の方の協力を頂き昼夜の想定で年2回実施している。訓練から反省し学んだことは、防災訓練ケース集にまとめている。消防署の方からアドバイスをいただき、全利用者が車椅子を使って安全な避難の実施につなげている。月1回のスタッフ会議で職員は、災害時の対応を話し合い緊急時に備えている。	年2回の防災訓練を実施しており、そのうち1回は夜間想定としている。隣の小規模多機能型居宅介護事業所と合同で行い、出火場所等の設定や避難経路もその都度変更し臨戦態勢で臨んでいる。消防署や地元消防団、区長、近所の方数名が参加し、近所の方には避難後の見守りもお願いしている。地区との防災協定も結んでおり、万が一の場合、隣の小規模多機能型居宅介護事業所やホームへの地域住民の避難も可能となっており、食糧や介護用品などの備蓄も確保されている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	援助が必要な時、目立たずさりげない言葉掛けで対応に心掛けている。難聴の方には、アイコンタクト、耳元でゆっくりとはっきり伝えるように努めている。職員は自己評価で、自身の介護を振り返り反省する機会がある。また、スタッフ会議で職員は、言葉かけや対応について話し合いお互いに注意し努力している。	人権の尊重やプライバシー保護、言葉遣いなどを含めた接遇研修を実施しており、職員は人として守るべきこと、あるべき姿を理解し、日頃の支援に取り組んでいる。呼びかけは苗字、名前に年長者への敬意の念を込めて「さん」をつけてお呼びしている。入浴や排泄時にも本人の尊厳を傷つけないよう配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	「～は、どうですか」、「どちらがいいですか」と2択にして声を掛ける等工夫して利用者の思いや希望を確認している他、表情行動から意志をくみ取るようにしている。何度か同じ質問をして利用者が決定出来るように働きかけることもある。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	「手伝うよ」と声をかけて下さる利用者に、出来る手伝いをお願いしている。毎日「家に帰らなくていい」と心配している利用者の側により話を聞く。誰かが側にいて関わっているだけで、落ち着いた時間が過ごせている。暮らしに基本的な流れはあるが、利用者のペースを見守りながら対応に努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	身だしなみは本人の好みや意向により決めている。本人が決められない場合は、その日の気温や状況に合わせて、職員が選ぶこともある。化粧やカツラ等を楽しむ利用者もいる。ボランティアの協力で化粧を楽しむ機会があった。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	野菜を切つての下ごしらえやテーブル拭きを一緒に取り組んでいる。夕食には食べたいと希望するメニューにすることがある。「おいしいわ」と食べている時は、その言葉に感謝して共に喜び合う機会としている。カウンター越しに並んでいく料理を楽しんでいる利用者がある。	利用者の高齢化に伴い少なくなっているが、利用者も可能な範囲でお手伝いしている。食材によりミキサー食にする方もいるが多くの方がほぼ常食で、一部あるいは全介助を必要とする方より自力で摂取できる方のほうが多い。職員が献立を考え四季折々の行事や季節に合わせた食材を使い多彩な料理を提供している。誕生日には赤飯と煮物でお祝いし、おやつにショートケーキでお茶会を開き家族も参加することがある。建物の周りが果物畑で囲まれていることもあり近所の方からのモモ、梨、ブドウ、リンゴなどの差し入れも多く、おやつを殆どを賄えているという。ラーメンなどの外食に出掛けることもある。	

グループホームサン・オアシス

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者の希望を確認し、咀嚼や飲み込みの状況に合わせて食事の形態を決めている。利用者の状態により水分摂取量を記録している。食事摂取量の記録は、欠かさずに行ない健康状態の把握と支援につなげている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアは、義歯の洗浄を含めて利用者の出来ない部分を補うようにしている。歯ブラシ、くるりナブラシ、歯間ブラシ、歯磨きテッシュなど口腔内の状態に合わせて利用している。歯の治療は利用者の状況により歯科医の訪問など協力を得ている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	リハパンを利用している利用者の排泄のリズムの確認と利用者の様子を見逃さないことで、タイミング良くトイレで排泄する支援をしている。利用者に応じては、声がけやトイレの表示を工夫して、トイレでの排泄を支援している。	自立の利用者もいるが、リハビリパンツにパット、オムツ使用など、一人ひとりに合わせ、昼間はできるだけトイレで排泄できるようにしている。夜間もポータブルトイレを使用したり、厚めのパットを使用するなど、快適に過ごせるようにしている。定時で体位交換をすることもある。利用者の負担を軽減するために可能な限りパットを使用したり、価格の安いリハビリパンツなどで対応している。トイレ上部の棚にはカーテンで覆われた介護用品が並び、利用者への介助が素早く出来るようになっている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取は起床時から1日を通して不足しないように心掛けている。毎朝食にバナナを取り入れている。おやつには乳製品や水分摂取に心がけている。排便の確認および記録と下剤の調整をしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴は利用者の希望を確認して、気分や体調に配慮して行なっている。清拭、シャワー浴、洗髪など状況に応じた支援が出来る。入浴支援に時間と複数の介護者が必要になり、全員が毎日入浴することは出来ないが、利用者の希望に配慮して支援している。	入浴時自立されている方は若干名で介助を必要とする利用者が多い。毎日入れるように準備しているがほぼ1日おきの入浴となっている。利用者によっては清拭やアルコールでの洗髪をすることもある。浴槽は一般家庭と同じ大きさで、また、介助することもできるので使い勝手は良く、季節の菖蒲、バラ、柚子なども入れ楽しんでいる。浴槽に浸ることができない利用者についてはシャワー浴で対応している。入浴を拒否されることもあるが時間を変えたり、声掛けのタイミングを変え臨機に対応している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	休息は利用者の希望に添い支援している。利用者の希望や状況により、自由に休息の時間を過ごしている。室温や寝具の清潔に配慮して、気持ちよく休息や睡眠がとれるようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個々の利用者が服用している薬の説明書は、ファイルにまとめて、いつでも確認できるようにしている。服薬状況、薬の変更や追加は記録して全員が確認出来る。誤薬の危険性に対応して、声だし確認をしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	台所の手伝い、花鉢の水やりなど出来ることは職員と一緒に取り組んでいる。テレビのリモコンを操作して好きな番組を楽しむ方、新聞を欠かさない方もいる。ボール投げ風船ゲームに力を発揮する人が多い。テーブル叩きが日課の利用者には、他者の批難に配慮した支援をしている。		

グループホームサン・オアシス

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	庭を眺める利用者のために、テーブル、イスを用意している。散歩を希望する利用者は少ないが、庭に咲く花や木々に興味を示す時は、庭に出て散歩の支援につなげている。家族と外出の機会が多い方もいる。希望を尊重して、お楽しみ外出を計画し外食の機会を支援した。	90歳以上の利用者が三分の二で、車イスや歩行器を使用する方が多くなってきていることから歩行機能の低下があり外へ出ることが難しくなっている。天気の良い日には敷地内の前庭や中庭で過ごすことも多く、市のオープンガーデンになっている庭園で色々な花を楽しんでいる。ドライブがてら買い物や食料品の買い出しにも出掛けている。また、花見やお楽しみ外出としての外食等にも少人数で出掛けている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を管理している人、また希望する人は現在いない。「お金が無いんだよ」と困っている時は、金庫に預かっていることを話して安心を得ている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	敬老の日や誕生日に届く手紙やお祝いを嬉しそうに受け取る姿がある。希望に添い、電話で家族と話ができるようにしている。また、「いつでも電話下さい」「一緒に介護しているつもりです」と家族の協力もある。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	食堂ホールのカーテンは一日中開けている。陽の光で明るい空間であり、一日の大半をホールで過ごす利用者が多い。干支や四季に合わせた飾りつけをしている。テーブルに着くことが出来ない利用者も過ごせる場所を設置した。空気清浄機を置き、室温や湿度にも気をつけている。	建物は13年を過ぎたとは思えないほど手入れが行き届いている。空気の流れが良く、夏涼しく、冬は結露もないという特殊工法で造られている。対面キッチンで利用者と職員が話しながら食事の準備ができ、利用者が集うホールも吹き抜けで、太い梁、高い天井に天窓と広く明るい快適な環境となっている。また、エアコンとパネルヒーターで冬場も暖かい。廊下には利用者や職員を紹介する一人ひとりの写真が貼り出され親しみを感じる。置の小さがりには大きなぬいぐるみが置かれ、時計も掛けられ、カレンダーや献立表なども貼られ、家庭らしさが感じられる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールで過ごす席は、利用者の希望に配慮している。家族の要望がある時、利用者間の関係で席を替える時は、カンファレンスで話し合い決めている。気の合う利用者が出るだけ一緒に過ごせるように、テーブルの位置にも配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	思い出の写真や手作りの置物等が置かれている。好きな動物や花等のポスター、ぬいぐるみを置くことで会話が増えている。ベット上に大事なものを沢山置き安心して過ごしている利用者もいる。	居室には洗面台、クローゼット、ベッドなどが備え付けられている。利用者によっては布団で生活されている方もおり、テレビや小ダンスなど、馴染みの物も持ちこまれている。また、明るい陽射しが入るように各居室には出窓が設けられ、サボテンなどの鉢を置いている利用者もいる。花好きの利用者の居室には職員と協働して作った折り紙の花や四季折々の花の写真のカレンダーなども見受けられた。孫やひ孫など家族の写真も飾られ、利用者一人ひとりの思いに沿った居室となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者の身体状況に合わせて、安全で使いやすいように、トイレや浴室の手すりの増設、畳コーナーをフローリングに変えている。トイレの案内表示は利用者に分かりやすく迷わない工夫をしている。隣接の施設に行きたい時は、ベルを鳴らして開けてもらうことが出来るようにしてある。		